

## 編集後記

2019年12月に中国で発生した原因不明の肺炎について、新型コロナウイルスが関連していることが明らかとなり、短期間で感染が拡大しています。本国を含めて多くの国では感染者の増加や死亡者が連日のように報道されて、国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態となりました。私たちの日常生活にも大きな支障が出現しています。このウイルスは人から人へ伝染することが判明したため、日本でも1月28日に感染が確認された時点で強制入院が可能な「2類相当の指定感染症」に認定されました。透析施設での対応について、日本透析医会でもホームページで適宜更新して案内しています。新型コロナウイルス感染の今後の成り行きが気になるところです。

2019年は二つの重大な出来事がありました。一つは自然災害の脅威です。台風15号、19号は各地に重大な被害をもたらしただけでなく、透析医療にもさまざまな被害をもたらし、対応の必要性が浮上しました。本号では医療安全対策の項目で台風の被害と対応、災害対策の現状を特集しました。また熊本地震が透析医療に及ぼした被害や、兵庫県の災害時支援船活動の講演についても取り上げています。

二つ目は透析排水の汚染問題です。前号では透析排水管理の諸問題や3学会合同で作成された2019年度版透析排水基準が掲載されました。本号では引き続き北海道、東京、熊本の各地区の講演会で発表された医療機関での排水に関する諸問題について掲載されていますので、透析排水に関する問題点とその対策が把握できるかと思えます。

また2019年は医療施設で起こった事例が大きく報道されて、透析医療における透析中止が社会問題となりました。厚生労働省は2018年に新たに「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」を公表し、共有意思決定（shared decision making; SDM）や人生会議（advance care planning; ACP）の重要性を指摘しています。透析患者は人生の終末期と認識されていませんが、高齢者の増加や様々な疾患を併存する中で、各人の医学的状況や家族背景、人生観は多様です。本号では透析医療における死生観と笑いに関する論文を執筆していただきました。日々の透析医療を担う先生方の参考となることでしょう。

2019年の腎性貧血治療では、従来のエリスロポチン製剤と原薬や添加物など製造過程が同一の「バイオセウム」や、先発品と同等/同質の品質、有効性、安全性が証明された「バイオシミラー」が相次いで登場しました。また、エリスロポエチンとは作用機序がまったく異なる透析施行中の腎性貧血に対する経口製剤であるHIF-PHD阻害薬も市販され、現在も複数の製薬企業によって開発中です。両者は鉄代謝への反応が異なり、今後の腎性貧血治療にも影響を与えることが予想されます。本田浩一先生には腎性貧血治療と鉄代謝についての研究をまとめていただきました。

本号も様々な分野からタイムリーな内容を含めて編集することができました。これも執筆していただいた皆様方のおかげであり、感謝いたします。本号が皆様の透析診療の参考となれば幸いです。

### 会誌編集委員

久保 和雄 (委員長)	甲田 豊 (副委員長)
山川 智之 (担当理事)	今田 直樹
伊丹 儀友	久野 勉
小岩 文彦	佐藤 壽伸
篠田 俊雄	原田 孝司

## 日本透析医会雑誌

Vol. 35 No. 1 2020

令和2年4月30日 発行

発行人 秋 澤 忠 男

事務局 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-15-2  
淡路建物ビル 2F

TEL 03-3255-6471

FAX 03-3255-6474

E-mail [info@touseki-ikai.or.jp](mailto:info@touseki-ikai.or.jp)

ホームページアドレス

<http://www.touseki-ikai.or.jp/>

印刷所 (株) 三 秀 舎

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-12-2

TEL 03-3292-2881

FAX 03-3292-2884